

おばけの季節【自然霊篇】

陽羅義光

おばけというと、人の形をしたものや人が変化したもの、たとえば、

【のっぺらぼう】

とか、

【ろくろっくび】

などを連想し、

もしくは物の形をしたものや物が変化したもの、たとえば、

【からかさおばけ】

とか、

【ちょうちんおばけ】

などを連想しますが、こどものころを憶い起こせば、そのみならず、場所や土地そのものがこわかったことがけっこうあります。

べつだんそこからおばけが登場するわけでもなくとも、沼そのものが無気味だったり、竹藪そのものが物騒（ぶっそう）な気がしたり、岩そのものが陰湿なことを囁きかけたりしそうで。

かんがえてみれば昔から、

『地霊』

なんて言葉があり、家を建てるときにお祓いをする行事があり、地元の山に目を挙ぐ習慣があり、それは地のなかに神もおばけも隠れ棲んでいるのかとおもっていましたが、地そのものが神でありおばけであるのだとおもいはじめました。

地震は【おおなまず】のしわざ、

雷は【らいじん】のしわざ、

津浪は【うみぼうず】のしわざ、

昔の人はあんがいそんなものは信じていないで、天変地異の凄まじいおばけ性を、なにかのしわざにしないと落ちつかなかっただけで、内心は、

『地霊』

（『自然霊』といったほうが近いでしょうが）

というものを信じていた気がします。

というわけで前置きはこのくらいにして、懐爺と金ちゃんに登場してもらいましょう。

禿光山人 拝

* * *

「金ちゃん、【ところおぼけ】って知っていますか」

あるとき懐爺がききました。

「しらいでか。【ところてんのおぼけ】じゃろ。きみがわるそうじゃのう」

ぼくはしったかぶりをしてこたえました。

「ところてんは、わたしも大好物ですが、それではなく所、つまり場所、土地とか自然とかいってもいいでしょうが」

「おぼけのでやすい、ところ、ということかのう」

「いえ、ところ、そのものがおぼけなんです」

「ぐたいてきに、いってくれんかのう。たとえば【つつじとうげ】とか」

「躑躅峠は、よくおぼけが出没しますが、【ところおぼけ】ではありません」

「ならば、どこかいのう」

「百聞は一見に如かず、といいますからね」

「ということは」

ぼくの心臓がどんと鳴りました。

「ということは、はい」

「はい、はい」

「その【ところおぼけ】に逢いにゆきましょう。この村にもけっこういますからね」

「かいじいと、いっしょかい」

「たまにはよろしいでしょう。今日は五月晴れのいいお天気ですから」

天気の良い日は、居眠りばかりしている懐爺ですから、

「さつきばれ、ばんざいじゃ」

ぼくは心も晴れ晴れと、懐爺に同行しました。

【かがみぬま】

まず、懐爺が連れていったくれたのは、祠の裏の竹藪の裏にある、浮き輪くらいの、ちいさな水たまりでした。

「ずいぶんちっちゃな、いけじゃのう」

「池ではなく、沼です。これでもわたしが若かったころには、野球場くらいはありました」

「いけと、ぬまの、ちがいは、なんじゃ」

ぼくは、前から疑問におもっていたことを、口にしました。

「ひとくちでいうと、池は人工的に造られたもの、沼は自然によって造られたもの、ですかね」

「ならば、いけは、【ところおぼけ】じゃないのう」

「いいところに気づきましたねえ。ですから、地獄池なんか、ほんとうはこわくない。こわいのは、地獄沼ですね」

「このぬまは、【じごくぬま】かのう」

「これは【かがみぬま】といいます」

「ずいぶんやさしい、なまえじゃのう」

「昔昔、人さらに息子をさらわれた母親が、この地まできて、息子が死んでいるのを知りました。嘆いた母親は、息子を弔うために尼になったのですが、悲しみが癒えずに、この沼に身を投げてしまいました」

「ならば、【かがみぬま】でのうて、【みなげぬま】じゃ」

「それが、この沼に顔を近づけると、息子の顔が映る。それを繰り返すうちに、過って落ちてしまった、という説もあることから、鏡沼と名づけられたのです」

「なるほどのう。そのせつのほうが、あたっとるのう。なぜって、あまさんなら、はんぶん、しんどるようなもんじゃろ。わざわざ、みなげすることもあるまいからのう」

「わたしも同意見です。ところで金ちゃん、【かがみぬま】に顔を近づけてみませんか」

懐爺がうすら笑いをしています。

あぶない、あぶない。

「いやじゃ」

「そういわずに」

「かいじい、やってみい」

「わたしがですか」

「そうじゃ。かいじいは、かがみなんぞ、もっとらんじゃろ。いちど、そのむさくるしいかおを、みるがいい」

「では、お言葉に甘えまして」

いいながらも、懐爺は【かがみぬま】に顔を押しつけます。

「あら」

「どうしたんじゃ」

「紅顔の美少年が映っています」

「うそじゃ」

「嘘だとおもったら、のぞいてごらんなさい」

その手にのるか。

というわけで、【かがみぬま】見学はそこまでにして、次にいきました。

【うばぬま】

三十分ばかりあるいて、ついたのは躑躅峠のはずれです。
「よくきたもんだが、こんなぬまがあるとは、きづかなかったのう」
無理もありません。
生い茂った雑草に埋もれた沼でした。
「これは【うばぬま】です。昔昔このあたりに、人を食う鬼婆が棲んでいましたが、だんだん歯も胃もわるくなって、人を食えなくなり、自暴自棄になってこの池に飛びこんだのです」
「ならば【おにばばぬま】でよかろう」
「姥とは、老女のことをいいます。飛びこんだときには、人を食えなくなって、ただの老女になっていましたからねえ。村びともいささか同情して、鬼婆沼とはよばなかったんですな」
「して、どんなたたりがあるんじゃ」
「なにもありませんよ」
懐爺がまたうすら笑いをしています。
だまされてたまるか。
「だって、【ところおぼけ】なんじゃろ」
「祟りはありませんが、沼の底に鬼婆がいて、はいると足をひっぱられます」
「ほれみろ。あやうく、あしをいれとこじゃった」
「それは残念でしたね。そういう体験も一度はしておくものです」
「あほか。あしひっぱられて、おぼれしんだら、にどとできるもんかい」
「こんな浅い沼で溺れ死んだりしませんよ」
「ならば、かいじい、やってみてくれや」
「では、お言葉に甘えまして」
いいながらも、懐爺は【かがみぬま】に片足をつっこみます。
「ひええ、鬼婆がひっぱる一、金ちゃん、助けて一」
懐爺が情けない声をあげるので、ぼくは懐爺の手を引張りました。
足が抜けて懐爺は、
「金ちゃんのおかげで命拾いしました」
といったけれども、こんな浅い沼で溺れ死んだりしないので、ずいぶん大袈裟でした。
たぶんぼくの手に触りたかっただけなのかも。

ここもこのへんにして、こんどは躑躅峠を越えて、坂を昇りました。

【さかうらみ】

この坂の先には荒れ地しかないので、ぼくははじめてです。

昇りきると、

「さあ、もどりましょう」

と懐翁がいうので、いまきた坂を下ったはずなのですが、妙なことに、また昇っている感じがします。

「おかしいのう。さっきのぼった、さかじゃろ」

「当たり。この坂は昇ることはあっても下ることがないのです」

「くたびれるさかじゃのう。もしかして【くたびれざか】かい」

「はずれ。【さかうらみ】という坂です」

「【うらみざか】のほうが、ごろがいいがのう」

「昔昔、この先の荒れ地には、色街がありました」

「じんせいいろいろの、えろまちかい」

「人生えろえろの、色街です。ところが当然のように、村の男たちは、いくときは元気いっぱい。でも帰るときはお金も体力も使い果して、よれよれです。ですから、坂を下っているのに、いくとき昇るよりも、よたよたふらふらしている。怒った坂の霊は、それならば、帰りも昇り坂にしてやれと、さかうらみをしたわけなんです」

「どうして、それがさかうらみなんじゃ」

「村の男たちが、怒って坂に八つ当たりして、蹴飛ばしたりするからなんですな」

「やつあたりはいかん。ふたつかみつつに、おさえんといかん」

「それは金ちゃんの」

「じんせいいろいろの、じんせいくんじゃ」

「いいですねえ。わたしも真似します。では八つ紹介するところを、このへんでやめておきましょう」

「むむ、かいじい、やるのう」

「とにかく【さかうらみ】を下り、いや昇りましょう。あ、しまった、あそこに【ねずみざか】がある」

「【ねずみざか】も、【ところおぼけ】かい」

というわけで、【ねずみざか】にいきました。

【ねずみざか】

この坂は知っていました。

「ここは【ねこざか】じゃろうが」

どういうわけか、猫が屯（たむろ）する坂なのです。

野良猫だけでなく、飼い猫もこの坂にやってきては、ひなたぼっこしています。

だからぼくは、勝手に猫坂とよんでいました。

「正確には【ねずみざか】です。昔昔は、猫坂とよばれたらしいのですが、生まれ

たばかりの子猫を、みんなここに捨てにくるものだから、鼠坂としたんですね。猫でも鼠でもどちらでもいいようなものですが、鼠坂とよばれはじめてから、ここを昇り降りすると、ちゅうちゅう声でするんですね。それで晴れて、【ところおぼけ】の【ねずみざか】となりました」

「はれて、かい。くもって、じゃねえんか」

「どちらでもいいようなものです。それでは金ちゃん、昇ってみてください」

「【やかうらみ】よりは、らくじゃのう。けんど、ちゅうちゅういわんのう」

「あれ、きこえませんか」

「きこえんのう」

「耳は大丈夫ですか」

「かいじいよりはのう」

「わたしにはよくきこえますが」

「あれは、ねこのこえじゃ。ちゅうちゅう、でのうて、にゃあにゃあじゃ」

ぼくたちの周りには、白、黒、茶、三毛の猫がいっぱい。

数えなかったけれど、百匹はいただろう。

野良猫と飼い猫の区別はつかないが、たぶん太っているのは飼い猫だろう。

「猫はうんざりです」

「だいたい、ねずみはどこにおるんじゃ」

「鼠はいません。この坂そのものが鼠なんです。ほら、ちゅうちゅう」

ぼくは疲れた気分がして、あああと欠伸をすると、むこうに、赤ちゃんにおっぱいをすわせている母親がみえた。

「ねずみなもんか。おっぱいちゅうちゅうじゃ」

「あら、わたしとしたことが、まちがえましたか」

呆れたぼくは、あああとまた欠伸をすると、母親が気づいて、赤ちゃんを抱いてどこかへ行ってしまいました。

わるいことをしたとおもったが、これも懐爺のせいだ。

「つぎ、いこ、つぎ、いこ」

「すみませんねえ。ではこんどは、【まるっぱげーやま】と【みずないないがわ】」

というわけで、またあるきだすと、【ねずみざか】のほうから、にゃあにゃあにまじって、ちゅうちゅうと、はっきり、しかも大きくきこえました。

おっぱいちゅうちゅうではありません。

ぼくの知っている鼠の声です。

しかも、百匹、いや千匹はいる、といったすごい声でした。

「かいじいよ、きこえたぞい」

とぼくが正直にいうと、

「耳の錯覚かもしれませんが」

懐爺はもうつぎの【ところおぼけ】のことしか頭にないのか、どちらでもいいようなもん、といった返事でした。

【くそったれいわ】 【へたれいし】

「次はちょっと、あるきにくいところへいきます」

懐爺がそういうより先に、もうあるきにくくなっている。

いわば、岩場（いわば）なのです。

「このむらに、こんなとこ、あったかのう」

「ありますが、だれも近寄りませんね。近寄ったって、なにもいいことありませんからね」

「そんなとこへ、わしをつれてくるな」

ぼくがきつくいうと、

「だって金ちゃん、【ところおぼけ】は、こんなところに多くいるんですから」

しかたない、がまんしろと、懐爺の顔がいています。

「わかったぞい。それでこんどはなんじゃ」

「【くそったれいわ】と【へたれいし】です」

「うひ、そいつはいかんぞい」

「どうしてですか」

「くそをたれるいわや、へをたれるいしなんぞ、くそうてかなわん」

「ご心配なく、糞や屁はたれません」

「うそこけ。ならばなぜに、そんな」

といったとたん、

「くそったれ」

という声がどこやらでしました。

「なな」

つづいて、

「へたれ」

という声がどこやらでしました。

「なな、なんじゃ、あのこえは」

ぼくがあたりを見回していますと、

「あれこそ、【くそったれいわ】と【へたれいし】です。ちっとも臭くはないでしょ」

「くさくはないが、けしからんのう」

「べつだん、金ちゃんに対していっているのではないでしょう」

「いんや、わしのことじゃ」

「それは被害妄想（ひがいもうそう）というものです」

とそのとき、

「くそったれ」

「へたれ」

もう一度、
「へたれ」
「くそったれ」
ぼくはあたりを見回し、
「どのいわじゃ、どのいしじゃ」
「それが、わたしにも、どれだかわからないのです。そこが【くそったれいわ】と【へたれいし】の面倒なところですよ。もし退治するとしたなら、このあたりの膨大（ぼうだい）な岩と石を、ぜんぶ砕かないとなりませんから」
「そいつは、たしかに、めんどうな【ところおぼけ】じゃのう」
そのときまた、
「くそったれ」
「へたれ」
「へたれ」
「くそったれ」
ぼくは頭にきて、
「この、くそったれめ、このへたれめ」
と怒鳴りました。
すると、【くそったれいわ】と【へたれいし】の声が涙声になり、
「くそったれ～」
「へたれ～」
懐爺が頭をかかえて、
「あああ、やっぱり金ちゃんは、【くそったれいわ】と【へたれいし】をいじめてしまいましたね。いじめはいけませんよ」
「わしは、じぶんより、よわいもんは、ぜったいに、いじめんぞい」
「あのね、【くそったれいわ】と【へたれいし】は、金ちゃんよりずっと弱いんです」
「なぜじゃ」
「なぜって、【くそったれいわ】と【へたれいし】は、自分では動けません。それに、くそったれとへたれ以外の言葉を使えません」
「そいつはたしかに、よわいのう。きいてみると、わからんものじゃ。すまんことしたのう」
すると、
「くーそったれ」
「へーたれ」
【くそったれいわ】と【へたれいし】が、どこか元気になった、というより、こっちを小馬鹿にした声をだしました。
「ほれみい、あいつらは、わしらにむかって、いっとるんじゃ」
と懐爺に文句をいうと、
「ではこのあたりで、失礼しましう」

「つまらん、つまらん」
「こんどは、最後ですから、とっておきですよ」
と懐爺は片手をあげて宣言しました。

【まるっばげーやま】 【みずないないがわ】

道道、懐爺はいいました。

「ごぞんじのように、この村では、山は、大山、中山、小山、川は、大川、中川、小川ですが、それが常識ですが、じつは、【まるっばげーやま】と【みずないないがわ】があるんですね。そこを案内しましょう」

「つまらなそうな、やまとかわじゃのう」

ぼくは正直にいいました。

【まるっばげーやま】には、熊や鹿や兔がいそうもないし、【みずないないがわ】には、魚がいそうにない。

「いやいや、【ところおばけ】はどこも面白いですよ」

懐爺は弁解ぎみにいいましたが、【かがみぬま】も

【うばぬま】も【さかうらみ】も【ねずみざか】も、期待外れでした。

「おもしろいのは、かいじいだけじゃろ。しかも、わしをからかうのが、おもしろいだけじゃろ」

そう毒づくと、

「とんでもない。金ちゃんをからかったりしたら、どんなことになるか。【かがみぬま】にも【うばぬま】にものみこまれ、【さかうらみ】にはうらまれ、【ねずみざか】にはかじられます」

意味がわからない。

それではまるでぼくが、おばけの王様みたいではないか。

「そのことばが、からかうってことじゃ」

また毒づくと、

「いやはや、とにかく【まるっばげーやま】と【みずないないがわ】に期待してください」

「なまえが、ながすぎて、きたいできん」

「いやはや、はやいや、もう着きました」

懐爺が指差したところにあったのは、単なる荒地です。

これでは、いわれないとわからない。

「どこが、どうなんじゃい」

ぼくはかなり頭にきていました。

「あの少少凸のところが【まるっばげーやま】で、あの少少凹のところが【みずないないがわ】です」

「むむ」

ぼくはそうとう頭にきました。

「あまりの感動で、声がでないようですね」

「うう」

「わたしも同じです。この【まるっばげーやま】と【みずないないがわ】を眺めただけで、感動がこみあげます」

「くく」

「昔昔、この山は、緑いっぱい鳥いっぱいの美しい山でした。昔昔、この川は、清らかな水が流れ魚もはねる美しい川でした。ところが戦国時代に、この地に砦を造らざるをえなくなって、山を崩し川を塞（せ）き止めました。けれどもせっかく造った砦は、敵方に打ち破られ、それでこんな風になったのです」

「つまり、やまとかわの、いかりにふれて、てきにやぶれたってわけかのう」

「そうではなくて、やぶれてから、【ところおばけになったのです】」

「するてえと」

「そうです。味方の武士の血と肉を吸い込んで【ところおばけ】になったのが、【まるっばげーやま】と【みずないないがわ】なのです」

「するてえと」

「そうです。そうしていまだに、敵方のくるのを待ちつづけているのです」

「てきがきたら、どうなるんじゃい」

「山は崩れ、川はあふれ、敵方をのみこみます」

こんどはぼくが、懐爺をからかってやろうとかがえ、

「そいつはやばい。かいじい、にげるぞい」

「どうしてですか」

「わしのかんでは、てきがたの、たいしょうの、しそんが、かいじいじゃ」

「その勘は当たるでしょうか」

「あたらずとも、とおからずじゃ」

「しまった。わたしとしたことが、そこまでは気がまわりませんでした」

「おお」

ぼくはさけび、懐爺の手をつかんで、走りはじめました。

【まるっばげーやま】は、巨しく盛り上がったとたんに崩れ、【みずないないがわ】は、水が流れはじめるとすぐにあふれ、土と水がぼくたちを追いかけてきたのです。

「かいじい、はやく」

「心臓がとまりそうです」

「とまってもいいから、はしれ」

「金ちゃん、もう走れませんか」

「はしれ、はしれ」

「もう無理です」

「かいじい、かいじい」

「金ちゃんだけ、逃げてください」

「あほか、わしをだれだとおもっとるんじゃ」

「もう動けませーん」

「ならば、おんぶするぞい」

ぼくは、あんがい軽い懐爺をおぶって、ひたすら逃げました。

息がきれるまで、安全なところまで逃げて、

「かいじい、たすかったのう」

「金ちゃんのおかげで、九死に一生をえました」

懐爺は、安堵安堵安堵の表情です。

「かいじい、【まるっばげーやま】と【みずないないがわ】は、おもしろかったのう」

というと、懐爺はじつにじつに嬉しそうな顔をしましたが、その顔をみながら、ぼくは、もしかすると、あの山の崩壊とあの川の氾濫は、懐爺がなにかの術をつかって、あえて起こしたのではないかと、そんな気さえしたのです。